

出題意図

古典の原文を正確に読解するとともに、作者の意図を明確に読み取りそれをよく咀嚼したうえで、作品に対する自分の考えを正しい日本語によつて的確に表現する能力を測る。

解答例

細工、絵画、書道を例に挙げて、新奇な趣向で見栄えのする、大した技術がなくてもできるものと、地味に平凡に見えても研鑽を積んだ本格的な技術に基づいた作品とを二項対比させる。そして後者は長い目でみれば、その真価や優劣において明らかに前者より勝っていることを述べる。外見は派手だが深味のないものと本格的で重厚なものを、妻とするべき女性の性質に当てはめ、刺激的で気持ち惹きつける女性よりも生涯をともしで堅実でしつかりした女性を評価している。平安時代の貴族女性は一人で経済的に自立できる環境になかったし、男性が複数の妻に通う通い婚だったため、夫の立場が圧倒的に強くこのような一方的な意見が公然と述べられることや違和感を持つ。女性にはそれぞれの個性があり尊重されるべきだというのが現代社会の価値観であるからだ。しかし、当時の貴族の正妻は、現代の核家族の専業主婦とは異なり、使用人を含む大規模な家政を管理できる能力が要求されたであろうし、また魅力的な一時の遊び相手は貴族の男ならさほど不自由しなかったと思われる。そう考えれば、この「花より団子」的主張は、家政を取り仕切る妻の条件として極めて合理的・実的なものであり、恋愛ではなく結婚に必要なのは信頼でき、役に立つ女性という理性的な結婚観に基づくものと捉えられる。それは外見と内実を共に備えた完璧な妻などは存在しないという現実的な割り切りの裏返しでもある。(六〇〇字)

二

子年生まれの縁起をかつぐ者に保護されたネズミは横暴を極めていたが、家の主が変わるとたちまち皆殺しにされてしまい、悪臭だけが残ることになった。作者柳宗元は、このネズミたちを通して、有力者の保護を受けているのをよいことに横暴を極める人間たちにとえ、その害悪が国家をも損なうことを述べるとともに、有力者の保護を失えば、それらの者たちはたちまち滅びることになるだろうと述べているものと思われる。悪臭が後に残るとするのは、そうした者たちに対する柳宗元の深い軽蔑を、なぜここまで来たのだという言葉には、彼の深い嘆きを読み取ることが可能である。柳宗元はこのような形で、自分を追放した者たちを批判し、その破滅を予言している。しかし現実には、皇帝の信任を後ろ盾に高い地位を占めている者たちを排除することは容易ではなく、柳宗元の期待が実現する可能性は低い。誰よりそのことをよく知っているはずの柳宗元が、あえてこの文章を書いたところは、彼の現実に対する激しい怒りと、それでも失わずにいる希望を読み取ることができるとは思えないだろうか。更に、主人が替わればと期待していることから、彼が皇帝個人に対する忠義を重視していなかったことも読み取れる。(五一二字)